



●勤務医に関する話題や投稿などで構成するコーナーです。勤務医生活の雑感、あるいは意見をこの欄にお寄せください。

●投稿要領…700字程度、名古屋市昭和区妙見町19-2、愛知県保険医協会「勤務医コーナー」係まで。薄謝進呈致します。

題名をつけるなら 基礎医学かな

千種区 田中 勤

現役医学生や若手の先生方にはピンとこないかもしれないが、昔の医学部では二年間の教養部、四年間の専門課程とはっきり分かれていた。教養部二年間では自然科学や語学のみならず人文・社会の一般教育科目を履修し、なんと医学に關

する科目は学ばなかった。今も大学に勤める同級生に言わせれば、教養部二年間の足踏みはもったいなかったということなのだが、私としては旧制高校の名残のような教養部は来たる専門課程への憧憬を募らせる貴重な時間だった(いっぱい

遊んだ。一方で、早く解剖学や生理学などの医学らしい勉強がしたいという思いも強かった。

そして、いよいよ迎えた専門課程。教養部とは打って変わって、ペースの速さと情報量に圧倒される。生化学は脂質代謝のところをつまづいた。当時の担当の先生とは、自分が他大学に赴任した時に懐かしく再会したが、「すみません、先生の授業ついていけてませんでした」とは恥ずかしくて口に出せなかった。

あの時代から三十年近くなる。学生実習でやったPCR検査は広く普及し、今や遺伝子解析の時代である。生命科学は劇的に変化し、iPS細胞などのトピックスに心躍らされる。

STAP細胞が発表された時は、若い研究者の発想のすごさに驚かされたが、その後は残念な顛末に終わり、本当にがっかりしてしまった。しかし、細胞生物学に再び関心を持たせてもらったことも確かだ。

専門課程に進んですぐ、先輩に誘われ、背伸びして分子医学研究所の朝の抄読会に参加した時、当時の教授が大喜びで私の肩を揉んでくれたことを懐かしく思い出す。朝が弱いので数回参加して挫折したが、先生

の学問への情熱に基礎医学研究者のロマンを感じた。

もう私も恩師の先生方の当時の年齢を超えたような気がする。基礎医学も含めて、現代の医学が意味不明

になった時が引退かなと思いつつ、嫁さんに文句を言われつつ高い医学書を買いかみ(買っただけ)、とりあえずわかっている気になって仕事を続けている。